

リーダーの選択方法がフォロワーからのリーダーへの期待に及ぼす影響

○山本幸一¹・古川善也²・井福井謙一郎³・中島健一郎²

(広島大学教育学部¹・広島大学大学院人間社会科学研究所²・長崎女子短期大学幼児教育学科³)

問題と目的

近年のリーダー研究では、リーダーとして相応しい特性や行動の検討に加え、フォロワーからの視点を重視してきた。Lord & Maher (1991) は、フォロワーがリーダーを評価する際、集団業績を参照するもしくはリーダー行動を観察し、自らがあらかじめ持つリーダー像（リーダー・プロトタイプ像）と比較することで評価することを明らかにした。一方、現実場面では、新しいリーダーを選択する際、フォロワーがリーダー行動や集団業績を観察できない時期が存在する。このときフォロワーからの評価は、リーダーへの「期待」という形で行われるだろう。それでは、この「期待」は何によって決定されるのであろうか。

また本研究では、フォロワーが抱くリーダーへの期待を高める要因の1つとして「リーダーの決定方法」、特に「集団意思決定によりリーダーを決定すること」を扱う。藤井・竹村 (2002) は集団意思決定において、プロセスの公正さが結果に影響し、多数決・くじ・話し合いの方法の中で、多数決が最も個人の利己性を活性化した方法であることを判明させた。ここからリーダーが多数決で選ばれた時、フォロワーは、「自らの持つリーダー・プロトタイプ像が反映された結果」と捉え、リーダーへの期待が増大すると考えられる。以上のことから、本研究では、リーダー選択場面の1つとして、大学のサークル場面を取り上げ、サークル場面において、期待が強まるリーダー決定方法が多数決であるかについて本研究で検討していく。

方法

参加者 18歳～30歳までの大学生・短期大学生、もしくは大学卒・短期大学卒の383名（女性278名）に紙面、あるいはWebでの質問紙調査を行った。

要因計画 リーダーの選択方法：3（くじ・多数決・立候補者による話し合い）×リーダー候補者の情報：目標達成志向の高・低 2×関係維持志向の高・低 2 の参加者間と、リーダー・プロトタイプ像からリーダー期待への変容の参加者内の4要因

混合計画。

手続き 大学内での文科系サークルのメンバーである場面（補助資料参照）を想定させた後、リーダー・プロトタイプ像をリーダーシップ尺度（三隅, 1984）で測定し、加えて、集団内の意見分散の推定を測定した。次に、リーダー選択方法（3）とリーダー候補者の情報（4）についてシナリオ内容により条件操作を行った後、リーダーへの期待（リーダー・プロトタイプ像と同様の尺度）、サークル・コミットメント（橋本ら, 2010）、組織市民行動（田中, 2001）を測定した。

結果

リーダーの選択方法、リーダー候補者の情報、参加者内でのリーダー・プロトタイプ像からリーダー期待への変化を独立変数、リーダーへの期待を従属変数とし、分散分析を行った。その結果、4要因の交互作用が認められた ($F(2, 369) = 3.898, p = .021$)。次に、多重比較（Holm法）から、リーダー候補者の情報が「高×高」であるとき、多数決の場合でのみ、リーダー期待への変化が有意に大きくなった（補助資料参照）。また、独立変数を選択方法、リーダー候補者の情報、従属変数をサークル・コミットメント、組織市民行動として分散分析を行ったが、決定方法による差異は見られなかった。

考察

本研究では、リーダー候補者の情報がポジティブであるときに、多数決がリーダー期待を高めるという結果が得られた。これは、フォロワー自らの持つリーダー・プロトタイプ像に一致している情報を、多数決がより強めた可能性を示唆している。しかし、本研究は想定場面での結果であり、リーダー情報を現実場面より客観的に処理していることも考えられる。また本研究では期待の形成のみに着目しており、その後のリーダー行動を想定できていなかった。今後は、リーダーの選択方法のみならず、リーダー情報による影響、現実場面での影響など、詳細な検討が必要である。